



『冬の時代』

教育委員会事務局

五十嵐 文雄

最近、職員機関紙『みなと』の記者から「公務員は『冬の時代』を迎えているといわれているが、どう思うか？」とのインタビューがであった。

人事院勧告の凍結、退職金の大幅削減のことなどを指して、『冬の時代』というらしい。

公務員に対する批判も、以前は、市民との接客態度、汚職等個々の公務員の資質なり、品性なり個別的な問題が多かったが、最近のマスコミ論調は、公務員の給与、待遇面から行政目的、課題まで多方面にわたる批判になってきている。

法規や永年にわたって培って

きた知識や経験を使いこなすことよってこれまでなんとかやってこられた仕事も、市民の価値観や生活様式が多文化・多様化され、それだけ行政に対する要望も複雑かつ高度なものになってきており、公務員もそれに対応しようとする意識変革が迫られているのである。

その意味では、公務員は『冬の時代』を迎えているのかも知れない。

しかしながら、現在のような多文化社会にあっても、また、減量経営の時代にあるからこそ、新しい事態に立ち向ってそのなかから学びうるものを学ぶ、自ら積極的に進歩するという意欲と可能性が個々の公務員に求められているのであり、公務員をめぐる周辺状況にとられすぎた論議は公務員生活を決して明るくするものにはしない。

むしろ、このような多文化社会にあって、市民生活を豊かにする公務員の具体像を論議してみたいものである。

阿姆斯特ダム市の老人給食サービスを見て

磯子区 根上三千代

老人福祉の先進国オランダの阿姆斯特ダム市で、老人給食サービスの実態に触れる機会を得た。

給食サービス用食事の調理は老人ホームのキッチンが受け持っている。メニューは、スープ、肉・野菜料理、デザートで五品位。アルミ箔で中を仕切った発泡スチロールのケースにぎっちり詰められている。一食分、日本円にして七五〇円（利用者負担）。給食と、それを戸口まで届ける役目の婦人を乗せた給食サービス車に同乗し、配食先の老人宅に案内してもらおう。

石造りのアパートの急な階段の上の部屋に住む九五才の老人宅。とても元氣そうだ。「階段は大丈夫？」と聞く私に、「もう二六年も住んでいるから」との答え。慣れた環境なので危険はないのだろう。私の方がほとんど元氣が危ない。

配食担当の婦人は主婦。パートタイムで、時給七百元。週二回この仕事に従事している。待っている老人のために、時間に追われながら、阿姆斯特ダムの古い住宅の特徴である急な階

段を昇り降りして給食を届けるのは、大変な仕事だ。「ポラテイアの心がないとできない」とのこと。彼女と老人達とのやりとりはなごやかで、給食そのものは勿論、彼女の訪問がひとり暮らしの老人の心をなごませる大きな要因となっていることが伺える。

オランダを含めて、西ヨーロッパでは、産業革命以後の都市化によって、大家族制度が崩れ、老人は社会が世話をしなければならなくなった。この点では、社会的合意が成り立っており、それが老人福祉施策を一定レベルまで、引き上げているのである。

〈あとがき〉

水に関わる話を取材してまわっているうちに、人間とは随分きたないものなのだ、と気がついた。とくに大都市のように人間が過度に集中しているところでは、それだけ膨大な汚物が排出され、結局川や海に過度な負担を強いっている。しかし、私たちの暮らしの場から汚物は速やかに遠ざけられていくと、なかなか

阿姆斯特ダムで私が出た給食サービスを受けている老人達は、誰もが明るく、ひとり暮らしの湿っぽさなど全く感じられなかった。この明るさは、福祉施策が定着し、日常生活が安定しているところかきえているのであろうか。

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一一二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

かそのことに思い至らない。

都市生活の快適さ―清潔、スビード、安全等―が、自然を犠牲にした上で成立しているのだとしたら、そういう生活を見直さない限り、都市の自然は戻ってこないのかもしれない。

「早く、きたない、危ない」、毎日、我が子に言っている言葉を思い出して、反省する次第でした。

〈中川〉